子ども文化の詩学（1）

生まれたての言葉

森下みさ子

◆言葉の産声を聴く

「わたしの好きな、ちいさなエピソードがあります。」と記して、詩人の工藤直子は、若い母親から届いた一通の便りを紹介しながら、次のようにつづっている。[1]

「その子はブランコが大好きで、（公園に）行くとまずブランコに乗って、お母さんにそっとおしてもらうのを楽しみにしていました。ある日、いつものようにブランコに乗ったのですが、その子は、ふっと空を見上げて、そのままじっと、なにかに見とれている。ブランコをこ

ぐのも忘れて。なにがあるのかしらと、お母さんも見あげたけれど、風が吹き、広々と空があるばかりでした。ふしぎに思って、お母さんは「どうしたの？」と、たずねました。するとその子は、まっすぐに、天を指さして、ただひとこと、「あお」と言ったのだそうです。

『ライオンのしっぽ』より

▲『ライオンのしっぽ』

ただそれだけ？　と思われるかもしれない。しかし、この短いエピソードには言葉の魂にさとい詩人をして「『ことば』の持つ不思議なちからを、あらためて思い起こさせ」るだけの何かが潜んでいる。少し頭を上げて、眼前に突き抜けるように真っ青な空を思い浮かべてほしい。どこまでもどこまでも青く青く広がる空……女の子はきっと、その広がりと青さに心底打たれたのだ。大好きなブランコをこぐことさえ忘れるくらい。だから、母親に問われたとき、そうとしかいいようのない表現で、彼女は「あお」と口にした。

それは、幼い彼女がどこかで習い覚えて何度目かに口にした「あお」という言葉であったかもしれない。私たち大人にとっては、「青」という言葉は、何千何万と口にしてきた、言い慣らされた言葉である。しかし、ここに表れた「あお」は、そうではない。女の子が心の底から「これが『あお』なんだ」と驚きをもって気づき、言葉がもつ

抽象的な概念と目の前に広がるそれ（ひたすらに青い空）とを結びつけた瞬間、すなわち「あお」という言葉が、その指し示すものを得て産声をあげた瞬間が、ここには記されている。「あお」は、今ここに、空の青さを命として生まれたのである。

考えてみれば不思議なことだ。この澄んだ空のどこにも「あ」の音もなければ「お」の音もない。空は音もなくシンと広がるばかりである。にもかかわらず、言葉は「あ」という音と「お」という音をつなげて、この広大無辺な広がりを染める色を表わす。いつとはわからない、はるか昔に「あお」という言葉は生まれ、長い時間を経て育ち用いられてきたのだ、私たちの文化において。女の子は、自らの発見によって、太古の昔に生まれた言葉を、今ここにもう一度産む、混じりけのない明瞭な発音で、「あお」と……。

子どもから発せられた、その産声に、傍らに居た母親は共振し喜び、言葉を産むことを生業とする詩人は、言葉の不可思議な力を再発見する。子どもと文化との幸福な出会いを通して、大人は言葉が生まれるときの奇跡を味わっているように思われる。

◆生まれたての世界と出会う

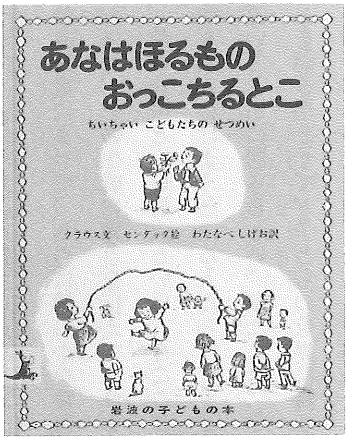
この例に限らず、真新しい感性でこの世界に入ってくる「子ども」は、限りなく詩人に近い。見慣れたこの世界も子どもたちに説明してもらうと、たちどころに詩的な言葉が沸き立つ場所になる。小さな子どもたちがいろいろなものを説明してみせた記録には、子どもと世界のみずみずしい出会いが、言葉になって表れている。[2]

たとえば、「あな」。あの丸くうがたれた空隙（くうげき）やへこみ、さまざまな大きさや形や深さ、それぞれ

の目的や機能をどう説明すべきか戸惑う大人を尻目に、子どもたちは即座に答える。「あなは」……「ほるもの」「おっこちるとこ」「むこうがわをのぞくとこ」「はいってすわるとこ」「なにかかくすこともできるよ」と……。子どもとのかかわりにおいて、「あな」はさまざまに現れてくる。子どもたちの説明は、大人のように「穴」を一つの概念でくくろうとはしない。あくまでも自分がかかわることによって、その都度その都度とらえようとする。穴は子どもとのかかわりにおいてさまざまな大きさや形や働きをもって、そのとき、そこに生まれてくるのである。

子どもたちが答える「説明」の言葉は、自らがかかわって生まれる世界とともに、やはり「今、ここに」生まれてきた言葉たちである。あの空の気づきとともに発せられた「あお」と同じように。だから、それらの言葉は、子どもと世界の結ぼれのさなかで息づく、生きた言葉となる。

「みみ」は、今その子にとって「ぴくぴくうごくもの」であり、「て」は「つなぐために」あり、「うで」は「だきあうために」ある。「えんちょうせんせい」は、何よりも「とげをぬいてくれるひと」だし、「かいだんはすわるとこ」だ。「かいがら」は、「うみのおとをきくもの」になり、「よるをながめていると」「ゆめ」が見えてくる。大好きな「どろんこ」にいたっては、「とびこんで、すべ



▲『あなはほるもの　おっこちるとこ
—ちいちゃいこどもたちのせつめい—』

りこんで……」、もう表現しようがないくらい心弾む体験から「おっころりんのしゃんしゃんってするところ」（『あなたはほるもの　おっこちるところ』より）と、泥と一体となった体のリズムを真新しい言葉に乗せて表わす。これらはみな、今ここに生じている世界との関係において、新しい輝きをもって生まれてきた言葉ではないだろうか。

◆子ども文化の詩学に向けて

いきいきと脈打つ子どもの説明に、絵本作家のモーリス・センダックは、勝るとも劣らない絵を付して、子どもが世界と出会う瞬間をみごとに描き出している。大地の声に応えるかのように棒一本でぐりぐりと「あなをほる」子ども、大きな貝殻を耳にあててうっとりと「海を聴く」子ども、首まで泥につかってまどろむ幸せそうな子ども……。子どもたちの瞬間瞬間の答えは、大人になってもなお子どもの感性を心の内にもち続ける絵本作家によって、さらに明らかな輪郭を得て表わされ、その生成の輝きを伝えてくれるのだ。

絵本作家といい詩人といい、今ここに世界の息吹を刻みつけようとする人たちは、子どもの心に近いところに居るらしい。私たちは、それらの作品を導き手として、子どもの世界に通じる路を見つけることができる。子どもの相棒として長らく親しまれてきたおもちゃ、子どもに愛され続けるお菓子、世代をわたって延々と伝承されてきた遊び、繰り返し口ずさまれる歌や物語の数々……、それらはみな、この世に来てまもない小さな人たちの心をとらえて離さない、不思議な魅力をもっている。その力とはいったい何だろうか。

子どもと世界のかかわりを、子どもの心身の育ちの過程に焦点を当ててみるなら、それは「発達」の問題になるだろう。また、この社会に加入

していくうえで必要な知識や方法を授けることに重点をおくなら、それは「教育」の範疇(はんちゅう)に入るだろう。いずれも子どもが育っていくうえで大切な視点であることは確かである。しかし、それらと重なりながらも、それらに回収されることのない広がりとして「子ども文化」があるのではないだろうか。

合目的的にはとらえることのできない、子ども特有の感覚がこの世界と出会うところに生じる諸々の事象を「子ども文化」という視点から見つめ直してみたい。発達や教育の意味や価値を担った、子どもの成育過程を跡付ける文法に対して、「子ども特有の世界」は、それらには組み込まれない「詩的作用」に満ちている。この世界にやってきた小さな人たちが、この世界とじかに触れ合うとき、そこに生じるかかわりのみずみずしさを、既存の文法を揺るがせたり覆したりする詩的な働きとして掘り下げてみること。ここではそれを「詩学」と呼ぼう。そして、子ども文化をめぐる具体的事象に寄り添いながら、そこから発せられる「詩的作用」をくみ取りつつ、子どもの世界の探索に乗り出していきたいと思う。

（白百合女子大学　文学部　児童文化学科
単著『おもちゃ革命』岩波書店、一九九六年、
『娘たちの江戸』筑摩書房、一九九六年など。
共著『文化・交通する』東京大学出版会、
『ものと子どもの文化史』勁草書房、など）

引用文献

1. 工藤直子／著　長　新太／絵『ライオンのしっぽ』大日本図書、一九九四年
2. ルース・クラウス／文　モーリス・センダック／絵　わたなべしげお／訳『あなはほるもの　おっこちるとこ-ちいちゃいこどもたちのせつめい』岩波書店、一九七九年
保育園と幼稚園の子どもたちがさまざまな単語に対してしてくれた説明にセンダックが絵を付した絵本